

風 狂

第43号

風 狂 の 会

詩

象（かたち）	長尾 雅樹
尊い人	高村 昌憲
牡蠣	出雲 筑三
鎌倉散策	高 裕香
聖アントワーヌの誘惑	
——ダリの画題による——	原 詩夏至
疲れ目	なべくら ますみ
ちよっこし	北岡 善寿

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十七）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

もったいない	神宮 清志
--------	-------

翻訳

アラン『大戦の思い出』（九）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

輪を描いて消えてゆくもの
明滅を繰り返しながら
うかびつつ沈みつつ
泡沫の燐光を放って
笑う毛髪
くるくると小さく軽く巻いて
目のごとく
口のごとく
顔の輪郭をして
きのこの胞子の乱反射で
おどけてもいないのに
おもわずクスツと笑って
米粒ほどの目もりから
こぼれ落ちる釘の穴
煙の色はみどりの輪
ふわふわと水底から立ち上ぼる
気泡が水面で破裂する
俺は妖怪変化
七つの顔を持っている狸の役者だぞと
見えない目から舞台を覗く
頭デッカチの奇妙奇天烈
入道雲の変幻自在とか
原子爆弾のきのこ雲かと
地より湧き出ずる
輪を描いてうつりゆくもの
膨張し拡大し
縮小し収斂して
目が増殖して
口がひしゃげて
消えた鼻
消えた耳
煙の一瞬の放射球体から
突然に虚空に充満して
さてこれからどのように崩れようかと

医者は人間の辛い病気を治す人だ
病人の相手は誰もしたくないのに
判事は卑怯な犯罪者を罰する人だ
刑務所には誰も入れたくないのに

坊さんは亡くなった者を弔う人だ
死者には誰も関わりたくないのに
しかし彼らは尊敬されて来たのだ
人に対し戦意も功名心も無いのに

殆ど毎日同じ仕事に精を出すから
職業は自らの欲望を抑制する技だ
世の中と人のために尽力するから
自分のために行うことはないのだ

それなのに自分の夢を追えと言う
これでは誰も職業に就けなくなる
勝利のために諦めずに戦えと言う
これでは詩人は志を書けなくなる

天下を取って日本一になれと言う
これでは挫折しかないに違いない
勝利者や成功者がしたり顔で言う
これでは誰も尊い人に気付かない

今日は約束した牡蠣を食べよう
手術の日は迫っている
友も同じころ何処かで食するはずだ

まずは馴染みの洋食店に向かう
淨くて威厳に満ちたシェフハット
軽やかな音が聴こえてくる

カキといえば亜鉛
必須ミネラルはどこから調達するのか
人間にはできない技の凝縮

頑丈な殻の中にある
柔軟で豊かな生命体
ホッカホッカのカキフライ

そして次は心の戦いの準備
執刀医にも牡蠣を喰わせてみたい
大海の恵みの幸に祈りを込めて

2月3日 今年初めてのハイキング
北鎌倉駅で降りると 久しぶりの皆の笑顔
リックの中で、おにぎりがころころ転がる

天園コースを目指して 建長寺へ
節分の豆まきで 豆が天空へ舞い上がる
福を呼び寄せ 必死で豆を懐に

取れぬ私は今年も不運か？
分けてもらった豆を食べて
いざ、鎌倉の海へと向かう

冬の鎌倉の海は銀にときめき
丸すぎる 地平線を目指し
寒さの中にも 我のあることを覚える

——ダリの画題による——

聖人君子じゃない
少しもない
むしろ〈世界〉の
彼は誰時の神隠しに
心底怯え切った子供なのだ
離婚や 再婚や
その他諸々の〈家庭の事情〉で
お母さんが何人もいる子供が
そのお母さんの数だけ幸せだという
方程式が信じられずに
日暮れになれば
今はとりあえず
たった一人のお母さんの待つ
たった一つの家へと 子宮へと
駆け戻らずにはいられない病気の子
一夫一婦制なんて結局そんなものだ
浮気であろうが不倫であろうが
クラブであろうがスナックであろうが
迷子が 人さらいが
好きなら勝手にすればいい
だから
ほっといてくれないかな
人のことは
そうともこんなことそう長くは続かない
いつか〈世界〉は俺に追いつき
俺を鷲掴みにしてどこかへ連れてゆく
要するにそこそこもちやいいのさ
もちろん可能なら絶命まで
聖アントワーヌは砂漠へ逃れた
それでも奴らはそこまで追って来た
弱い犬程よく吠えるその犬のように
十字架を振り翳す丸裸の老人
それはおまえだダリ

そして俺だ
おまえにはガラ
そして俺にはかみさん
助けて、お母さん！
ではなかった、神様！
泣き叫ぶ聖なる子泣きじじい
それでも〈世界〉は
あのキリンのようであり
ゾウのようでもある
荒野のお立ち台の上のボインの隊列はもう
そこまで迫っている
偉そうに

バスの窓際近くの席に座っていた
外の景色は何気なく変化して行く
いつもの道を
いつもと同じ様子で

信号を通り過ぎ
見慣れた高層マンションのベランダ
洗濯物が気持ち良さそうに揺らめいている
はっと！ 目を凝らす

手すりに覆いかぶさる黒い影
あんなところに人が
思わず息を止め腰を浮かした
飛び出しそうな声は殺して

豊かなふくらみを持つ形は動かない
背を太陽にさらしうつ伏せたまま
この光景に気付く人はいない
ゆっくりと瞬きをした

黒い影と思ったのは
ウエットスーツという代物
あの部屋の住人は昨日海へでも行ったのか
それともこれから行くのか

私の眼は疲れている
さっきは値札を読み間違え
思わぬ高い肉を買ってしまった

「ちよっこし」
この言葉に僕は躓く
後続く言葉がなくて
「ちよっこし」が人の口から聞こえる
出雲に近い町を浮べて見るしかない
海辺に出ると天人の
羽衣でも風に靡きそうな
松林の続く弓なりの半島が見える
突端は鼻をこすりつけるように
山並みがうねって迫る恵比須
大黒の半島の喉元にくつつくばかり

鼻先にはそれぞれ港町がある
昨夜は竹橋という所で開かれた宴会で
弓なりの半島が郷里の
羽衣ではなく洋服姿の
美貌の女が傍に座った
「あなたはカドさんの親戚でしたか」
「あの先生大学をやめて
田舎に帰って暮らしています」
「もう一人カドさんがいるのですが・・・」
何故かここでちよっこし躓く
それで喋っている間
なんとなく女の首を見ていた
忙しい女はちよっこし
居ただけで帰って行った



三浦 逸雄 「鉢植えの花」 8号（麻布・油彩）

ある置き引きがクルマの中からヴァイオリンを盗み出した。ケースを開いてみたところ、あまりに古いヴァイオリンだったので、こんなもの金にはならないとすぐに叩き壊して捨てたという。ところがこれが、なんとあのストラディヴァリウスだった。クレモナヴァイオリンの中でも特別に貴重な逸品である。とにかくいかに現代の技術をもってしても、あれだけの音が出ないことを不思議がられている名品中の銘品なのだ。

これが如何に貴重品かということになると、専門外の者は論評を控えるのが妥当だろう。値段というものは正直なものであって、その点から推測することはできると思う。二十世紀のころは、家一軒の値段といわれ、数千万円で買うことができた。ところがその後の高騰によって、二〇一二年のオークションでは十二億円まで跳ね上がった。それだけ出しても入手困難なので、この先どこまで高騰するか不明である。こんな人類の宝とも言うべきものを叩き壊してしまうとは、なんともったいないと開いた口がふさがらない。

それよりもっともったいない話がある。「春のうららの隅田川…」これは明治時代の名曲「花」である。そして「荒城の月」「箱根八里」いずれも瀧廉太郎の作曲、お馴染みの名曲で親しみ易い曲想となっている。「荒城の月」のメロディーはベルギーで賛美歌として歌われているというから、世界的な名曲といえる。瀧廉太郎はその名の高い割には、作品数が少ない。そのほかに童謡「雪やこんこ」「お正月」「鳩ぽっぽ」などがあり、あまり馴染みはないもののピアノ曲「メヌエット」などクラシックの小曲も残っている。

瀧廉太郎はその才能を買われて、ドイツのライプツィヒ音楽院に留学した。しかし肺病を患って一年後に帰国し、翌年故郷で永眠、ときに二十三歳という若さだった。問題はその後起こった。ドイツ留学から帰国したとき、当地で作曲した交響曲、協奏曲などの楽譜がトランクにぎっしり詰まっていた。その楽譜のすべてが灰燼に帰したのである。瀧の母親はこの天才の息子を溺愛しており、ドイツ留学に反対していた。自分の息子を遠い国に行かせるなんて、まさに国家による略奪のように思っ恨んでいた。そこへあまりに早い死、悲しみに沈み、怒り狂った母親がすべてのドイツ留学の作品を火に投じたのである。楽譜ばかりではなく、それに付随するあらゆるものを焼いたといわれている。

盲愛というけれど、盲愛による愚行これに過ぎたはないだろう。本当に勿体無いことをしたものである。ストラディヴァリウスは、まだ六百挺ほど現存しているけれど、この消失してしまった作品群にはお替りがない。永久に失われてしまったのだ。しかもこれこそがメインであって、わずかに残った歌はほんの小技に過ぎないのである。クラシックの大曲には、きっと世界中で愛されるような名曲が含まれていたに違いないと思う。

山本作兵衛という元炭鉱夫が老後に描き続けた絵がある。この絵の素晴らしさは、すでに山本作兵衛氏存命中から知られていた。それが近年世界中に知られるようになり、日本で初めてユネスコの「世界記憶遺産」に登録された。いよいよ高い評価を世界的に得つつある。その報道の中で分かったことがあった。

山本作兵衛氏は中高年以後、炭鉱夫時代の経験を書き、ついに一五〇〇枚の原稿を書き上げた。ところがこれが公刊されることを嫌った妻が猛反対したので、すべて火中に投じ灰燼に帰した

という。女房というものはある場合最も困った存在になってしまう。書いた文の中に個人的なことがあって、それを人に知られることを嫌い、全体の価値を考えることもなく全否定してしまう。とかく身近な人には欠点ばかり目について、その芸術的価値が分からないことが多い。山本作兵衛氏もよく思い切って焼却したものだ。作兵衛さんは大の酒好きで、退職後は家で酒を飲み、絵を描き、原稿を書いていた。そんな良人を、女房はいつも罵っていたであろう。作兵衛さんとしては、せっかく書いた原稿も他ならぬ女房に非難されては、火に投ずるほかなったのだろう。

もっとも焼却されたから、のちにあれだけの絵が描かれることになり、かえってよかったではないかという見方もあるだろう。しかしそういうものだろうか。文章で残すことが出来なくなって絵を描いたということは、表現したいという意志の大きさを見せつけている。であればやはりその文章は貴重だったのではないかと思わずにいられない。

最後にこのわたし自身のもったいない話を、この際しておきたい。これは第三者から見れば大したことでもないだろう。なんだそんなことか、で終わってしまうだろうと思う。しかしわたしにとって、しだいにそのもったいなさが大きくなりつつあるのだ。六三歳で定年退職したときから、その頃流行っていた「自分史」を書き始めた。わたしは尋常ならざる育ち方をしたので、幼児から小学校時代にかけて、細部にわたって記憶していた。まず赤ん坊の時のある一場面の描写から、この記録を書き始めた。この記憶の細かさにはある種の「心の異常」が絡んでいるようだ。ムーヴィング・マインド（揺れ動く心）あるいはマインド・ワンダリング（彷徨う心）をもっている場合、普通では考えられないような記憶力をもつケースがある、とものの本には書いてある。

その頃定年後によくある同窓会がもたれて、久しぶりに昔の友に会うことが出来た。名刺交換した一人の級友から、メールが届いた。その文面が感じよかったので、たちまちメールのキャッチボールを頻繁に行うようになった。その相手を仮に 氏としておこう。氏は中学校時代、ともに新聞の配達をしていた。わたしは中卒後夜間高校に進んだけれど、彼は新宿高校に進学した。その後も彼は同じ新聞販売店で働き、受験に失敗してそのままそこに住み込みで働くようになった。ぜひと頼まれて住み込んで若いものの指導をする意味もあったと聞いている。驚いたことに、一浪後に東大合格を果たしてしまった。確かに彼は小学校時代から抜群の成績だったけれど、いかに何でも新聞販売店に住み込んで働きながら、東大合格を果たすとはと皆が驚き、話題になったものだ。

東大法学部を卒業するとき、通産省へ就職する道があったけれど、あえて民間の大手電機会社に就職した。彼は社長室長になって本領を発揮し、労働組合対策をはじめ、社長の挨拶文の作成から、社の運用にまで、的確な働きをしていった。氏が付いている以上この社は安泰だとまで言われた。そうした 氏と急に親しくなって、その頃書き始めた自分史を読んで感想なり意見を聞きたいと思った。添付して送ると、隅々まで丁寧極まりない指摘を付けてきた。これに勇を得て、次々と書き進めるごとに送付して指示を仰ぐようになっていった。添削指導のオンパレードとなり、元の文がどこに在るのかわからないほどに変貌していった。どこから見てもケチのつけようがない文になっていった。と、そのときは大満足だった。

ところが、同じ新宿高校から東北大学の理工学部に進んだ女性のクラスメートに会って、そのことを伝えると「それはダメよ、やめた方がいい」と言い出した。彼女は明治時代の文豪・内田

魯庵の孫娘だった。映画界で長年働いて、近年は鈴木清順監督とコンビでいい仕事をしていた。ある映画雑誌に連載した映画界の逸話は素晴らしい名文だった。さすがに明治の文豪の血は争えないと思った。

「あの人の文を読んだことある？あんな文章を書く人に直してもらったら、せっかくの生き生きした文章が台無しになってしまう」

この指摘はずばり的を射ていた。そういわれてみると 氏の文章はまさにお役人の公式文書を彷彿させるような、なんとも退屈極まりないもので、お終いまで読むのが苦痛でたまらないものだど気が付いた。そう気づいたときは、自分史もすでに高校時代を過ぎていよいよ青春の動乱期に差し掛かっていた。ただその辺になると彼とともに身近で暮らしたわけでもないで、小中学校時代ほどに直されなくなっていた。

小中学校をクラスこそ違い同じ学校で過ごした関係で、彼としてはこの文を個人史ではなく、学校の同窓会の記録としたい意図があったことを後に知った。やがてわたしは水商売の世界に入り、社会運動に身を挺し、さらには心の揺れがひどくなって病院に入り、その病院内での細部にわたる描写を進めていった。その辺になるとさすがに 氏の及ぼざるところとなり、ほとんど字句の直し程度で本質的な修正は影を潜めていった。

のちにこの作品をある出版社に持ち込んだ。編集者は丁寧に読んでくれて、前向きに出版を検討してくれた。ただし前半の一〇〇枚くらいを書き直してほしいと条件を付けられた。後半はいいけれど、前半の事実の羅列みたいところはだめだと言われた。「事実の羅列」この言葉に愕然とした。確かにその通りに違いなかった。そこで書き直しを試み悪戦苦闘したが、それが容易でないことを思い知らされた。結局それはならず公刊に至らなかった。

氏は法律の文書をもっぱら勉強してきているので、主語述語が鮮明であり、繰り返しが無いように細心の注意を払い、少しでも余計と思われる表現はカットする。こうなるとどこからも突っ込まれるところもないだろうけれど、味もそっけもない文章となり、結果として事実の羅列みたいなものになってしまう。

それでは文学作品は読まないのかというと、大いに読んでいる。それもとんでもない量を読んでいるのだ。文学ばかりでもないだろうけれど本は一か月に三〇冊くらい読むという。『火花』も読んだけれど「繰り返しが多くて、文章として落第」と評している。氏は文学として評価の定まったものは大いに良しとする。その辺が法律家らしいところである。良識を最も重んじ、保守的であり、世の秩序を大切に考える、法律家はそうした立ち位置をもっている。文学というのとは大方この反対の立場に立つ。今までの世の在り方をひっくり返そうとする傾向にある。古典文学なら、世の多くの人々が納得したものであって、氏もそれなら十分に納得できるのである。

一度記録されてしまうと、その記憶は消えてしまうということを発見した。何度も思い出そうと努力したが、どうしても最初に書いた文章は再現できなかった。こうなったことについて、氏には何の責任もない。すべてはこのわたしがいけなかったのである。わたしの自信のなさ、劣等感、依頼心の強さ、こうしたものがそうした結果を招いてしまったのだ。今さらもったいないと嘆いても始まらない。それより前記のストラディバリウス、瀧廉太郎の作品、山本作兵衛氏 の原稿のもったいなさに比べれば、ほとんど意味のない付けたりに過ぎない。しかしあえてそんな付けたりを書いてみないでいられなかった。 (完)

第七章

これらの思い出は全てが最初の冬に関係があります。そして、思い出の日付を殆ど書き入れることを可能にするのは、四季の色彩です。砲兵としての我々の戦争は、取分け挑戦とか反撃とか懲罰としての砲撃にあります。以下は、私が偶然に監視手として判断を下した一つの事例です。森の端にはガルガンチュアが言っている様に、私たちから約六キロメートル離れた処に、煙が見える一〇五ミリ砲の四台の榴弾砲がありました。それらは殆ど毎日私たちを砲撃していました。それらが破壊されることを私たちは知っていました。そして私にはその作戦を遠くからゆっくり観察している時間がありました。私は、小石を投げる様な砲撃を始めた七五小隊の少し後方におりました。一人の人が上に向けたり下に向けたりして発射したりする時刻となり、砲撃が始まりました。私は一種の煙を出している処に砲弾の爆発を認めました。そして私が言えるのは、彼らがあちらこちらの森の中へ降りて行き、目標から極めて遠く離れていたことです。早く砲撃しても何の役に立つのでしょうか。その反対重砲の発砲がありました。我々の二つの砲兵中隊による一斉砲撃は素晴らしく、私たちが認めていたのと同じの地点に集中していて、その砲兵中隊は狙われていました。その砲兵中隊は無言の儘で死者の様でした。我々は死体と残骸になっていると想像しました。我々が砲撃するのを止めた時、沈黙が支配しました。そして再び四つの大きな煙を見ましたし、四つの砲弾の音も聞きました。退却をしなければなりません。相手の砲台はそこに置かれていて、敵の砲兵たちが見えるボーモンの町は火山の様になっていて、人の住めない地獄でした。六キロメートル先にある処をその様に想像します。実際の処、我々の動きも一時間程の間は苦しいものでしたし、殺された馬も一頭おりました。

歩兵たちは私たちにとって、泥だらけになった幽霊でしかなく、交替の時間に、つまり薄明かりの時にちらっと見るだけでした。その時、砲兵隊は発砲せずに沈黙を守る様に依頼されていました。時々道を沈黙して横切り、再び降りて、直ぐに幻の様に消える蒼白い縦隊が見られました。彼らは暗い夜に再び昇って来ては過ぎて行きました。春の初め頃に暖かくなって来ると突然に異臭を放つので、私たちは井戸の水を時々汲みました。眼に見えない羊の群となって、私たちの周りで押し合っていました。「両手で！ 両手で！」と言っていた声を私は聞きました。私たちは仲間たちを大変に哀れに思いました。大尉は一度か二度、洗濯釜で紅茶を用意させました。喉を鳴らす音がしましたし、幸せそうに唸っている声がしました。真つ暗闇の中でのことでした。

攻撃に失敗したことも何回かありました。以下は攻撃が我々の損失になったものです。それらの攻撃をそっくりその儘集めても、大きな不都合にはなりません。我々はベルネクールを通過して機敏でした。つまりB司令官によるものであり、彼は攻撃を連絡し得る限りは勝利を確信していました。それでも容易ではありませんでした。奇妙なことに我々の将校はこの作戦に一つも参加していませんでした。幾つかの砲兵中隊には自分たちの目標がありましたし、私たちも数々の命令を受けていました。そして歩兵隊の地下室へ屢々走って行かなければなりません。連絡網は切られていたり妨害されていたからです。砲撃の下準備をするとなるや否や、Wと私は走ったり跳んだりして、信じられない位に熱狂していて如何なる恐怖もありませんでした。でも、二人の興奮が一緒に運ばれて行くことは出来ません。そのことは理性によって同じ装置に関心が行

くことになり、信じられない位にお互いが似て来ます。逃げる事、又は攻撃することは、常に走る事です。最後には殆ど全てが次の言葉に落ち着く命令になります。「徐々に砲撃の速度を遅くすること」。興奮は完全に失敗しました。私はそれらの結果を一度見ました。あるいは寧ろ聞きました。攻撃が失敗した後では、何時もの様に仄めかしただけで理解しなければならなかったのです。私は次の様な内容の伝言を歩兵隊へ伝えました、「監視所から見えたのは、兵士たちの混乱と戦闘の一種の中断です。この混乱に関して報告して下さい」。その回答は考えても既に私には驚きです。しかし私はその回答を正確に再現します。それらのことは忘れられません。その班は次の様に回答しました、「一時休戦は負傷兵たちを退却するために結ばれた。体面上の一斉砲撃は戦闘の再開を告げたのだ」。私は今、司令部上層の回答を引用します。何故なら、その回答はまさに軍隊式であるからです。「事態があなたの言う様に運ばれるのは不可能である。もっと納得のゆく説明を私は待つ」。そうした後で、私は実際にもっと適当な報告を伝えましたが、大変に混乱し、その時は人間も武器も動けず信じられない泥濘で、戦闘の一時中断が考えられました。更に私は、もっと混乱した悲劇的な話を聞かなければなりませんでした。夜になって、私たちの電話室に将校たちがテーブルに着いていました。私の短靴が嘗てそうだったのと同じ位に、頭からつま先まで泥だらけの二人の中尉がおりました。これらの人物たちは狂人の様でした。そして、ばらばらになった破片の様に、それでも大変に明瞭であった非難の声を出して防壁の中で飛び上がっていました。部下たちは腿まで泥濘に嵌まって、お祭り騒ぎの様に銃を発射していました。明らかに攻撃は不可能であり、非常識でさえあり、支離滅裂で理解出来るものではなく、取っ掛りさえもありませんでした。走ることも出来ませんし、歩くことさえ出来ませんでした。「彼らは従ってそこへ見に来ているのである。彼らは何も信じないし、あそこで座った儘でいる。しかし私たちは全員に言いに行くのである」。彼らは平静になって、元気を取り戻しました。それから少し後に、私は彼らを待っている車まで案内しました。私は怒りの最後の爆発の様な声を聞きました。「彼らがここで鎮まったのは大変幸いだ。彼らは銃殺刑ものだった」と最後にT大尉が言いました。

私がこの冬の期間に記憶に留めていることは、信じられない程の混乱であり、秩序ある教育の欠如です。子供たちの戦争です。我々の砲兵中隊の下士官たちは命令を受けました。B司令官は我々の大尉たちとは知り合いでなく、私たちしか信用していない様に見えました。砲手たちは悪魔の如く大砲に飛びかかり、砲尾に砲弾を装填する前に細長い砲弾に優しく接吻するのであると語られていました。私が再び奮い立たせるための或る伝言を送った時も同じで、そのことを私は信じました。私が電話から聞いた騒ぎとは、熱い歓声だった様に思いました。どんな権力にも嫉妬があります。その理由が説明していることは、我々の将校たちが地下室に止まっていたことです。決着が付いた時に、彼らには次々に情報がやって来ました。私は憤慨させられました。理解することが出来ませんでした。これらの狂気は一九一五年四月の攻撃で終わりました。砲弾を数え始め、何事かを準備し始めました。

私たちを興奮の中で困惑させるのは、全てが教育計画によって始まりましたし、私たちは奇妙であると考えました。しかしながら始めなければなりませんでした。そして、良く見るための教育は、軍人たちにとっての特技であり、彼らは驚くべき教師たちです。私たちは棒の上に電話線を張ったり繋ぎ合わせたりすることを覚えるための、住居出来る村まで班になって移転しなければなりませんでした。それは私たちが大変良く覚えたことです。その様にして一度ならず、私は

先ず通常の任務を任せられました。そして実際に私は一度も如何なる実習も受けませんでした。しかし或る日の朝、出発しなければなりませんでした。傷病軍人は残りました。そして、ベルネクールやフリレイへ回り道をさせる新しい命令が途中でありました。教育は最早必要でなくなりました。私は黒人の村の人と知り合いになりましたが、大変上手に仕事を守り養成されていました。前線から五百メートルの処でした。私は気にもせず板の上で眠りましたが、榴散弾で起こされました。私はそこで、私には大変に慣れ親しんだ道にもそれが転がっていたのを見ましたが、後で危険と見做すのを学びました。その日は新たな場所で、私たちは新兵としての勇気を持ちました。その夜は待機しなければなりませんでした。そして、参謀部の或る将校は大きく傾いた平原に私たちを導きました。左側には歩兵隊がおり、右側には森があり、その一本の樹木には、監視所と記されていました。歩兵隊の仕事として展開している前線と、監視所の仕事としての相手と、歩兵隊の監視所としての相手があります。新規の有り余る程の設備があります。でも、暗い夜にしか操作しません。二班でやります。下士官のデュジャルダン、何時も行っていた様に最も危険な任務に就きました。私は序でに陽気で果敢としたのっぽのこの戦略家に敬意を表しています。彼は将校になりましたが、それを自慢することはありませんでした。監視所では、私を伍長と見做していました。私たちはそこで時を待ちます。夜になると騒々しく興奮しました。私は、一五五ミリ速射重砲である〈リマヨ〉が何台も到着したのを見ました。これらの巧妙な機械に私は驚嘆しました。次に煙の出ない火薬と同様に、速射が政府の考えでもあるのを私は理解する機会がありました。速射は直ぐに砲弾が不足します。ところが重砲は熱くて操作が出来ません。それで〈リマヨ〉は呆れる程射程が短かったことを私はつけ加えて言います。それ故に前線近くに十分接近しなければなりませんでした。ドイツの重い曲射砲の射程は十二キロメートルでした。その様にして彼らは殆ど手の届かない処に止まっていました。彼らの発砲音を聞くには、極めて良く聞かなければなりませんでした。この攻撃は効果が無かったと私は今では言えます。そして偶然に、その時から少し経ってから私はまさにT司令官の口からその理由を知りました。我々の七五ミリ砲の四分の一は吹き飛んでいました。速射の影響でしょうか。あるいは間違った口径を決めた弾薬の影響でしょうか。多分、両方です。しかし、恐怖の的と判断されて、我々の軽砲に関しては一種の無力と化していました。何故なら、恐らくばらばらになって仕舞う大砲の側には誰も止まらないからです。穴から長い紐を引っ張って発砲が行われていました。七五ミリ砲で短い時間に、どんな場合でも二発発砲する方式を取り始めると、信頼が少しずつ戻って来ました。私たちのものも、まさに同じく旧方式に後退して腕の力に戻るものになりました。

私はこの奇妙な夜の事を思い出しますが、それは夢の様でした。弾丸は絶えず音を立てて唸っていて、私たちのうち誰に命中するのも私には理解しようがありません。弾丸は十分に高い処を通過しているものと私は仮定します。しかしながら待機している間に明け方になると、私は砂で覆われた地面に沢山の小さな噴火口の様なものがあることに気付きました。すると誰かが、それは弾丸であると私に言いました。私には信じ難いことです。それらの出来事によって何事であるのかが分かります。馬たちや人間たちがそこにいたのです。その日の夜は、私にとって幻影の夜でした。砲台は轟いていました。砲弾が私たちの頭上で唸り声を上げていました。弾丸も唸っていました。弾丸の尾が大空に光っていました。けれども、狭い谷の上、小さな茂みの上、広大な畑の上の大空は暗く静かでした。重要だったのは電話線を巻いた重いロールを移動すること

であり、巻き戻すことです。私たちには一種の希望がありましたし、桜桃酒の小瓶もありました。私は道に迷わない様に細心の注意を払いました。夜になる前に、森の端にあった樹木の特徴を覚えて置いて、再発見する様にしました。地面すれすれの処にある有刺鉄線網に出会いました。私はその間中手荒く体を横にしていたのですが、苦痛は無かったことを思い出します。難関を切り抜けるのに時間がかかりました。あの森と樹木を再発見した時は既に明け方でした。雲雀が鳴いていました。私は全く幸福でした。土手で私は、我々の動きを観察して電話を受けていた一人の砲兵を見ました。それはゴンティエでした。嬉しい驚きでした。彼には十分な火と温かいミルクがありました。この楽しい一時の後、黒人の村へ戻ることが問題でしたが、援護になるものはありません。私たちは無邪気に行きました。しかし、走ったり腹這いになったりしなければなりませんでした。その日の夜に、私はパーティーを発見したかの様にポーモンを再発見しました。この攻勢は我が軍のやや右側で行われました。馬たちは軍用運搬車に繋がれていて、我々は十キロメートル前進して行ったと言われていました。日中に全てが決着しました。でも、私たちにとっては騒音でしかありませんでした。そして沈黙でした。その次に奇妙な噂が立ちました。私の若い仲間たちは全てを信じました。私は真実の原因の一つを、もう少し前に知っていたことを声を大きくして言いました。もしもそれらの噂を解明したかったなら、それらの情熱も見抜かねばなりません。そこから私は、もう一つ別の攻勢と関係があることの範を示します。私は伝令の車の中に戻りましたが、それは私たちが助手や神学校の生徒であると感じていた一種の看護兵に場所を与えた時、大敗とその付属情報を運んでいたからです。看護兵は、リモージュの連隊を告発しながら攻撃に失敗したことを私たちに話しましたが、社会主義者で一杯であったと言っていました。他の連隊はどうであったのか私は尋ねました。彼は言いました、「あゝ、脱出出来なかったのです。火の手が非常に激しかったのです」。その原因は、社会主義者たちにとってもまさに同じであったことを、私は優しそうな顔をすることもなく彼に理解させました。彼には恰も悪魔に見えたかの様だったのです。彼は道路へ飛び出しました。そして最終判決を行う宗教調停人の方へ逃げ去りました。軍隊精神と宗教精神には類似のものがあります。それは単に賭けの利益だけによるばかりでなく、判断力の礼儀正しさにもよるのです。伝令の私の友人たちも又、保守主義者たちの中におりました。沈黙によって私が一度ならず知ったことは、急進的な意見は維持するのに快くないということです。まさに急進的である純真な国民は不快感を与えられます。彼らには一つの教義であるか、もう一つの教義がなければならないのです。従って彼らは十分に若く、そして多分新しい行動を前にしているかの如く、新しい観念を前にして単に臆病になっているのであると言わなければなりません。何故なら、私を非難する様子でも、彼らは私への信頼を失わず、尊敬さえも失わないからです。私は任務によってこの種の抵抗に慣れました。しかし、ここでは再び殆ど未開人になった私は、納得させることさえしようとしませんでした。私は下品な冗談が上手くなり、謙虚に演じることに優れていました。T大尉は、私が他の兵隊と同じであったと時々私に言いました。（完）

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPST A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにはられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲 (たかむら まさのり)

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部(仏文専攻)卒業。詩集は『螺旋』(一九七七年)、『六つの文字』(二〇〇四年)、『七〇年代の雨』(二〇一〇年)。評論集『現代詩再考』(A&E・二〇〇四年)。翻訳は『アランの「エチュード」』(創新社・一九八四年)、アラン『初期プロボ集』(土曜美術社出版販売・二〇〇五年)、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』(文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年)。共同編纂『齋藤志詩全集』(土曜美術社出版販売・二〇〇七年)。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞(評論部門)。二〇一二年から電子書籍(パブー)に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロボ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹 (ながお まさき)

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』(共著)

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』(韓国・呉世榮)他

原 詩夏至 (はらしげし)

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』(共著)、句集『マルガリータ』『火の蛇』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞)、歌集『レトロポリス』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞)『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄 (みうら かつお)

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊(東京・銀座)、東邦画廊(東京・京橋)他で作品を発表する。

(以上)

同人誌 風狂（ふうきょう）第43号

2018年2月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/120110>

編集：風狂の会（担当：高村昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/120110>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト